

第1回 日本臨床薬理学会 北海道・東北地方会を終えて

北海道大学病院臨床研究開発センター

佐藤 典宏

会期：2017年7月15日（土） 13:30~17:40

会場：北海道大学病院臨床研究棟大会議室

会長：佐藤 典宏（北海道大学病院臨床研究開発センター）

1. 開催概要

第1回日本臨床薬理学会北海道・東北地方会を2017年7月15日（土）に、北海道大学病院臨床研究棟大会議室において開催した。本地区は本学会の会員および役員が必ずしも多くはなく地方会組織の発足および地方会の開催が遅れたが、本学会の渡邊裕司理事長のご指名で北海道大学病院の佐藤が呼びかけ人となり、世話人会を発足させた（Table 1）。世話人会においては、対面による会議が難しかったためメールにて意見交換を行い、第1回地方会開催の概要を協議した。まず第1回会長を選出し、その後は第1回会長を中心に地方会の内容を検討、本学会の基本である「薬物療法」と「臨床研究」を2つの柱としてバランスよく配分すること、講演、一般演題、シンポジウムを実施するこ

と、などをプログラム構成の原則とすることを決定した。またシンポジウムの主題を「臨床研究支援」とすることも合意した。実際のプログラムをTable 2に示す。講演2題、シンポジウム1題の枠組みは世話人会で決定していたが、一般演題については公募の上、6題の応募があり採択した。また、特別ゲストとして渡邊理事長から「WCP2018 KYOTO 開催に向けて」と題して、来年度の国際学会とのジョイント学術集会のご紹介をいただくこととなった。

地方会当日は、地方会の開催に先立ち世話人会を実施し、本学会および地方会の規定等の確認、地方会代表や監事の選出、世話人の増員を含む今後の運営方針などが協議され、決定された。また、第2回会長の選出も行った。その後、地方会が開催され、後述するような内容であった。また、

Table 1 日本臨床薬理学会北海道・東北地区世話人（発足時）

	氏名	所属
支部代表	佐藤 典宏	北海道大学病院 臨床研究開発センター
世話人	吉岡 充弘	北海道大学大学院医学研究院 薬理学講座
	田崎 嘉一	旭川医科大学病院 薬剤部・臨床研究支援センター
	古郡 規雄	弘前大学大学院医学研究科 神経精神医学講座
	伊藤 智範	岩手医科大学循環器医療センター 内科学講座 循環器内科分野・心血管リサーチセンター
	谷内 一彦	東北大学医学部医学系研究科機能薬理学分野・東北大学サイクロトロンラジオアイソトープセンター
監事	石井 智徳	東北大学病院 臨床研究推進センター 臨床研究実施部門
	稲野 彰洋	福島県立医科大学附属病院 臨床研究センター
	吉岡 孝志*	山形大学医学部 臨床腫瘍学講座
	小池 勇一*	奥羽大学薬学部 薬物代謝・薬物治療学
	工藤 賢三	岩手医科大学薬学部 臨床薬剤学講座

※オブザーバー

著者連絡先：佐藤典宏 北海道大学病院臨床研究開発センター 〒060-8648 札幌市北区北14条西5丁目

E-mail: nhsato@med.hokudai.ac.jp

投稿受付 2017年9月12日、掲載決定 2017年9月19日

ISSN 0388-1601 Copyright: ©2017 the Japanese Society of Clinical Pharmacology and Therapeutics (JSCPT)

Table 2 プログラム

<開会の挨拶>

佐藤典宏 (第1回日本臨床薬理学会北海道・東北地方会 会長/北海道大学病院臨床研究開発センター)

<WCP2018 KYOTO 開催に向けて>

渡邊裕司 (日本臨床薬理学会 理事長/浜松医科大学臨床薬理学会 講座, 国立国際医療研究センター臨床研究センター)

<講演 1>

座長: 工藤賢三 (岩手医科大学薬学部臨床薬理学講座)

「診療に役立つ薬物動態学 —相互作用を予測する—」

古郡規雄 (弘前大学大学院医学研究科神経精神医学講座)

<講演 2>

座長: 吉岡充弘 (北海道大学大学院医学研究院薬理学講座)

「臨床研究の規制に関する最新の動き」

佐藤典宏 (北海道大学病院 臨床研究開発センター)

<一般演題>

座長: 小池勇一 (奥羽大学薬学部薬物代謝・薬物治療学)

1. イマチニブによるアラキドン酸代謝阻害および関与する CYP 分子種の同定

戸田貴大 (北海道薬科大学臨床薬理学分野)

2. 第一世代抗ヒスタミン薬による眠気と CYP2D6 遺伝型との関連性

三浦淳 (北海道薬科大学薬物治療学分野)

3. 免疫チェックポイント阻害薬の血中濃度測定法の開発と臨床薬物動態解析への応用

福土将秀 (旭川医科大学病院薬剤部)

座長: 田崎嘉一 (旭川医科大学病院薬剤部/臨床研究支援センター)

4. ウルトラオーファンドラッグにおける臨床開発のポイントとは ~ウルトラオーファンドラッグ以外の希少疾病用薬品との比較から~

前田浩次郎 (北海道大学大学院医学院レギュラトリーサイエンス教室)

5. あきた治験ネットワークの取り組み

亀岡吉弘 (秋田大学医学部附属病院臨床研究支援センター)

6. Phase I Unit 施設整備と実施体制構築への取り組み

神宮真希 (北海道大学病院臨床研究開発センター)

<シンポジウム: 臨床研究支援のあり方を考える>

座長: 石井智徳 (東北大学病院臨床研究推進センター臨床研究実施部門)

稲野彰洋 (福島県立医科大学附属病院臨床研究センター)

1. CRC による臨床研究の支援について

~東北大学病院 臨床研究実施部門の場合~

相澤千恵 (東北大学病院臨床研究推進センター臨床研究実施部門)

2. 市中病院での支援の現状と課題

鮫沢綾子 (NTT 東日本札幌病院)

3. 先進医療 B の不適理由から考える研究倫理審査体制

叶 隆 (福島県立医科大学)

4. 臨床研究支援の実施と課題

岩山訓典 (旭川医科大学病院臨床研究支援センター)

5. 北海道大学病院における臨床研究の支援体制と CRC の実施について

佐々木由紀 (北海道大学病院臨床研究開発センター臨床研究支援部門・治験支援部門)

総合討論

<閉会の挨拶>

石井智徳 (第2回日本臨床薬理学会北海道・東北地方会 会長/東北大学病院臨床研究推進センター臨床研究実施部門)

終了後は懇親会を開催し、参加者間で有意義な交流が行われた。

以下、地方会の具体的な内容および終了後のアンケート結果等を報告する。

2. 講演

講演は2題行われた。第1題目は弘前大学医学研究科神経精神医学講座の古郡規雄氏による「診療に役立つ薬物動態学—相互作用を予測する—」という講演であった。古郡氏の臨床現場での経験に基づく実例を紹介しつつ、薬物相互作用についてわかりやすく解説した。終了後のアンケートで「古郡先生のご講演(特にCYP関連相互作用)が大変勉強になりました」との回答もあり、評価の高い講演であった。第2題目は会長である北海道大学病院の佐藤が担当し、「臨床研究の規制に関する最新の動き」と題して、特に臨床

研究法について現状と見通しについて解説を行った。終了後のアンケートでは「佐藤先生の臨床研究法についてもう少しゆっくり聞きたかった」との声があり、やや消化不良であったかもしれない(筆者、自戒)。

3. 一般演題

一般演題は、6題の発表が行われた。奥羽大学薬学部薬物代謝・薬物治療学の小池勇一氏、旭川医科大学病院薬剤部・臨床研究支援センターの田崎嘉一氏を座長に、口演の形式で実施された。Table 2に示すように薬物代謝や動態等に関する演題が3題のほか、レギュレーション、治験ネットワーク、Phase I Unitなど、多彩な発表が行われた。それぞれの演題に対して活発な質疑応答が実施され、充実した内容の一般演題となった。

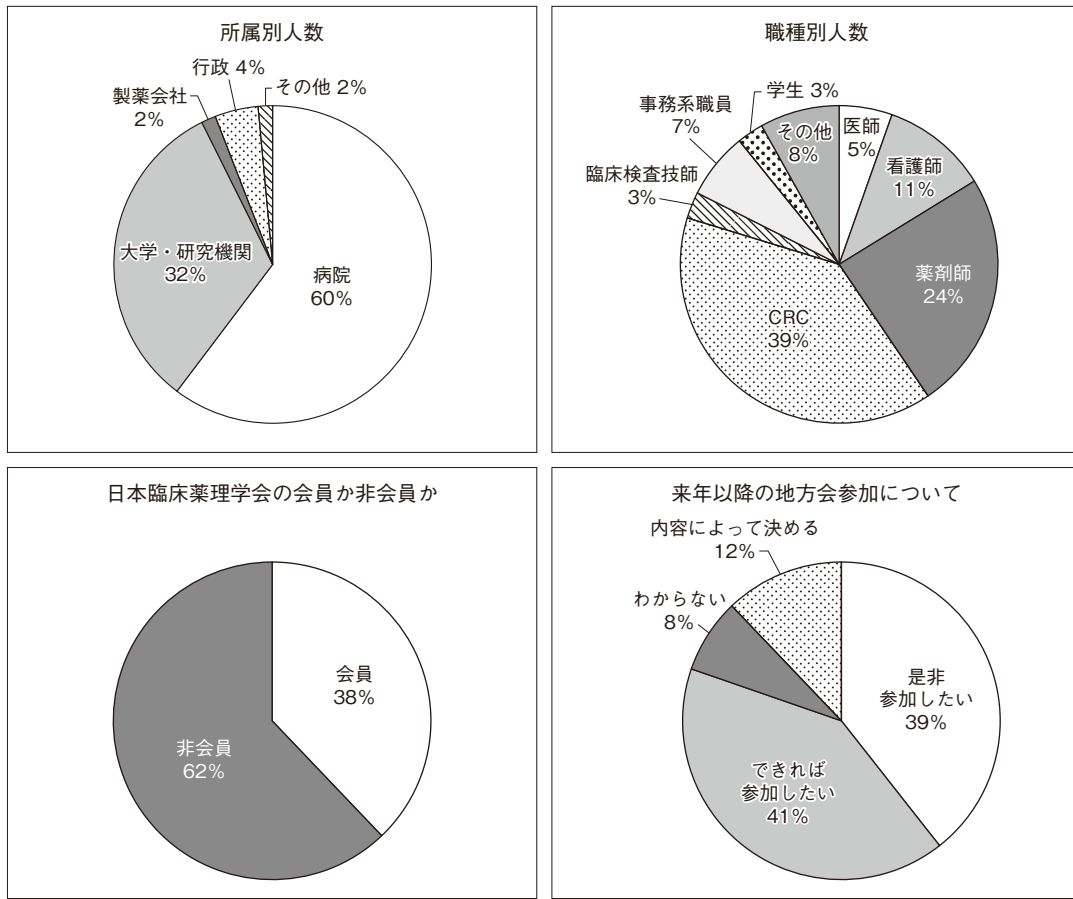


Figure 参加者アンケート集計結果

4. シンポジウム

シンポジウムは「臨床研究支援のあり方を考える」をテーマに、東北大学病院臨床研究推進センターの石井智徳氏、福島県立医科大学附属病院臨床研究センターの稲野彰洋氏を座長に、Table 2 に示した5名の演者による発表を中心に実施された。5名の演者は、大学病院や市中病院、CRCやスタディマネージャーなど種々の立場にあり、それぞれの視点から臨床研究支援の現状や問題点について発表が行われた。各発表後には座長の進行の下、活発な質疑応答や意見交換があった。終了後のアンケートでは「他施設の状況や問題点について理解できた」「他施設の臨床研究支援の体制がわかり参考になった」などの感想が多くあり、意義深いシンポジウムとなった。

5. 参加者の概要およびアンケート結果

今回の第1回地方会の参加者は108名であった。本地区の面積の広さや交通事情を考えると、第1回で100名を超える参加者を得たことは概ね成功と考えている。

参加者に対して行ったアンケート結果の主な点を Figure に示す。参加者の所属は、病院が60.0%、大学・研究機関

が32.4%と全体の9割を占め、一方でCROやSMOからの参加者はなかった(アンケート回答分)。次年度以降の広報のあり方について検討が必要と考えられた。職種別では、CRCが39.2%、薬剤師が24.3%であった一方、医師は5.4%であった。今後は医師を含めた多職種の参加を促すように検討したい。本学会の会員・非会員の別では、会員が37.9%、非会員が62.1%であった。本地方会を知った情報源については(複数回答可)、日本臨床薬理学会からの通知が35.7%、ネットの情報が20.0%などとなっており、今後の広報活動の参考にしたい。来年以降の地方会参加については、是非参加したいが39.4%、できれば参加したいが40.9%で、合わせて80%以上が次回以降も参加したいとの回答であった。また自由記載による感想では「とても良い刺激になりました」「地方会の開催をうれしく思いました」などの前向きな回答が多く、本地方会が参加者から好意的に受け入れられ、かつ地方会に対する期待の大きさを示すものと捉えている。また、今後取り上げてほしいテーマとしては、「臨床研究プロトコル作成法」「多施設共同研究、参加・資格・施設の現状」「法令対応」などが挙げられており、次回の参考としたい。

6. 今後に向けて

今回は第1回目の開催ということであり、かつ北海道・東北地区というカバーする面積が広いこと、さらに札幌開催ということで東北地区の方々には交通の便が悪いという点があり、参加者数の予測が困難であった。そのため、開催場所を会長所属の施設とし、講演やシンポジウムも地元会員を中心に編成し、開催費用を抑える形で企画した。実際の参加者は100名を超え、当初の悪い予測は良い意味で

裏切られたが、事前登録でみる限りは北海道の参加者が多くを占め、東北地区の参加者が少なかったという事実はある。次回以降は、より多くの参加者、より広い範囲の参加者が集まれるよう、世話人会を中心に検討したい。

次回第2回会長は東北大学病院の石井智徳氏と決定した。石井次回会長を中心として、次回に向けてよりよい企画を考え、本地方会および本学会の発展に寄与できるよう頑張っていきたい。